

令和2年度 北九州市高齢者支援と介護の質の向上推進会議

第1回 認知症支援・介護予防・活躍推進に関する会議 会議録

1 開催日時

令和2年7月20日（月） 18時30分～20時00分

2 開催場所

北九州市総合保健福祉センター2階 講堂

3 出席者等

(1) 構成員

伊藤構成員、小畑構成員、坂根構成員、佐藤構成員、重藤構成員、高橋構成員、竹中構成員、田代構成員、田村構成員、永野構成員、中村構成員、長森構成員、野村構成員、原構成員、宮本構成員、村岡構成員、力久構成員、若林構成員

(2) 事務局

総合保健福祉センター担当部長、地域福祉部長、認知症支援・介護予防センター所長、長寿社会対策課長、健康推進課長、地域福祉推進課長、地域支援担当課長、介護保険課長、

4 議事内容

(1) 代表、副代表の選任について

構成員の互選により、代表に伊藤構成員、副代表に長森構成員が選出された。

(2) (仮称) 次期「北九州市いきいき長寿プラン」の策定について

資料2 に基づき、事務局より説明

(3) 現行計画の取組結果と課題について

資料3 **資料4** に基づき、事務局より説明

- ① 高齢者の生きがい・社会参加など活躍の推進
- ② 主体的な健康づくり・介護予防の推進
- ③ 総合的な認知症対策の推進

5 会議録（要約）

資料5 に基づき、意見交換

① 高齢者の生きがい・社会参加など活躍の推進について

（代表）まず、高齢者の生きがい・社会参加など活躍推進について、意見等はないか。

(構成員) 昨今、高齢者の交通事故によって免許証を返納する高齢者が多くなっている。高齢者の活躍にあたり、免許返納後の移動手段の確保について、市の対策を教えてください。

(事務局) お出かけ交通という制度がある。公共交通が乏しいところにマイクロバスを走らせるもの。手元に詳細な資料がないため、別途情報を整理してお手元に届くようにしたい。

(構成員) 感染症対策を踏まえた移動手段の確保というのも、高齢者が知ることができる様に、検討してもらいたい。

(構成員) 「こういうことができますよ。」という発信ではなく、地域包括支援センター等が「こんなのがあったらいいな」という意見を集めるのはどうか。例えば、野菜を一生懸命作る高齢者に「デイに行って」というのではなく、いつでも畑に出られる環境をサポートするなど。小グループで「こんなのがあったらいいな」というニーズを拾い上げて、サポートをマッチングするほうが良いのではないかと、地域ケア会議に参加して思う。

(事務局) とすれば、提供側の情報に偏ることがある。それぞれに違うニーズを拾ってマッチングさせていく視点も検討させてもらおう。

(事務局) 地域包括支援センターでの個別ケア会議でも地域課題が出てくるが、その意見を集約して解決につなぐところまで行っていない。地域支援コーディネーターとも連携しているので、その他も含めて連携の発展を図っていきたい。

(事務局) 補足になるが、小学校区単位で開催されている「校区の作戦会議」と名付けている市の協議体で、地域の課題を出してもらっている。校区によっては、そこでボランティアとのマッチングをしているところもある。

(構成員) 行政関係者だけではなく、デイのスタッフにも聞いてみるとよいのでは？いろいろな考え方が出てくると思う。

(代表) 先程の調査結果では、社会貢献したいというところと、実態が伴っていないということがあったが、何か意見はないか。

(構成員) カフェオレンジを運営していたが、コロナの影響で休止し、いつ再開できるかわからない状況。200名いるボランティアの開設当時の平均年齢は70歳。4年たった

今は 75 歳。ボランティアとは文書でやり取りするしかなく、早い段階でネットの環境を作っておけば良かったと後悔している。スマホを持っているものは半数に及ばず、ラインもわからない。環境が全く変わってきたので、これまでの寄り添う・つながる支援から変換せざるを得ない状況になっている。これからの高齢者対策を考えると、環境が変わったところからスタートしなければならない。カフェマスターに何が起きているか…といえ、今まで地域で行っていたボランティアが中止になり「フレイル・認知症・うつが進みそう」という声が上がっている。今後は、環境が変わったことに対応して、デジタルスキルの向上を、高齢者をおいていかない形で進めていくことが課題だと思う。これから先、コロナ対策をしながらどう寄り添っていけるか。高齢者が 100 歳まで生きる時代になると、80 歳・90 歳になった時にどうなるのか分からない。特に、高齢者のデジタルスキルをおいていかないでほしい。

② 主体的な健康づくり・介護予防の促進について

(代表) 次に「主体的な健康づくり・介護予防」についての意見をいただきたい。

(構成員) 健康診査の受診率についてだが、集団検診がネットやはがき申込制となった。高齢者には電子申請は難しい。受診率も上がらないのではないかと。高齢者が簡単にできる申し込み方法が考えられないか。

(代表) 新たな形を考えていく必要があるという意見です。

(構成員) 「身近な地域で継続しやすく取り組みやすい仕組みづくり」とある。運動の専門職として総合事業と地域の筋力向上トレーニングに携わっているが、そのあとの繋ぎ先があまりないことが課題。地域交流デイは、要支援を受けている人は断られ、地域の元気な人のサークルに入るには体力的にハードルが高い。はざまにいる人を何かの形でつなげる事業が必要ではないか。

(構成員) コロナの影響を配慮する課題では、DVD や、地域のサービス提供にズームを活用することも考えていかなければならない。また、電子決済のペイペイなどについても、通所サービスの利用者から聞かれ、きちんと説明すると毎日のことなので、生活に馴染んでいる方を何人も見ているので、高齢者がデジタルスキルを身につけることは大事だと思う。

若い方で社会貢献したいという割合が増えているというデータもあったので、しっかりそういう人に地域に入ってもらい、デジタルスキルをアップするところに貢献してもらおうとよい。

ボランティアは、オリンピックや災害の時のようなイベントへのボランティアだけではなく、身近な地域でも社会貢献ができることを広める取組みがあるとよい。

(構成員) 総合事業に関わっているが、専門職同士の横のつながりを持ちづらい感じがある。例えば栄養ラボで栄養士と話すことで初めて得る情報があったり、この会議で他の構成員と話すことで課題に気づくこともある。専門職同士がつながる仕組みづくりも重要と考える。

(構成員) 住民主体の健康づくりの参加意向に関する調査結果の部分が重要で、「参加者として参加したい」「付いていきたい」など、自分で手をあげて呼びかけすることは苦手な高齢者が多い。リーダーではなく、後ろ盾があるからやれるという方が多い。これから企画をしていくときは、高齢者をお客様にしない、その方たちから自発的な意思が出たものを後押しするという形に持っていく。行政にも限界があるので、高齢者自身が変わって世の中を作っていくという機運が起こるようなやり方が必要。

③総合的な認知症対策について

(代表) 3番目の「総合的な認知症対策の推進」に移りたい。意見はないか。

(構成員) 認知症サポーター養成が進んでいるが、学んだ人がどのようにその技術を活かしていくかが課題。介護サービスに結びつかないような若年性認知症や、サービスにつながるまでの数年間、認知症であることを地域の人に言わずに過ごしている現状がある。何気なく地域に見守られ支えられていると感じるような声の掛け方などを一歩進んで勉強する場、フォローアップ講座が必要ではないか。

若年性認知症の方は就労で少しでも地域に貢献しているという思いが生きがいになっている。そのようなデイサービスが立ち上がっているという状況もある。少しでも働き、お金にもなり、当事者が活躍できる場として仕事があることが生きがいになると思う。希望宣言も出たが、自分たちが希望を持てる様に、希望をもって暮らしていけるという人が何人も出るように、仕事と結び付けられるとよい。

家族の会も交流会ができなかったが、久しぶりに交流会を開くと、ズームとかラインとは違って、ふれあいがあってみんなと一体感が持てる。コロナのことがある中で、そのような一体感を持っていけるかが課題。

(代表) 認知症に対する不安の割合が増加し、若い人の方がさらに高いという調査結果。いろいろやっているが、認知症になっても住みやすいという形に出ていないということか。

(構成員) 祖母が認知症で母が介護に通っている。自分には認知症が身近なことだが、周囲の同級生は祖父母が若く、認知症を身近に感じている人が少ない。高齢者の社会参加を考えると、若い世代が入って引っ張ったり、お客様として扱うのではなく、若い人がサポートして、高齢者の方が中心になって活動ができるとよいと思うが、具体的なやり方は浮かばない。若者もツールで繋がっていても、コロナの自粛で孤独を感じているの

で、高齢者はなおさらではないか。これからもっと課題になると思う。

(代表) 本日は時間の関係で発言できなかった方も、今後、是非貴重な意見を聞かせていただきたい。

6 報告事項

参考資料 に基づき、事務局より説明

- (1) 新型コロナウイルス感染対策課における事業実施について
 - ①フレイル予防対策リーフレットの配付について
 - ②令和2年度健康マイレージ事業の変更について
- (2) 年間予定